



CRESCENDO IV

It is completely connected this time with the past story, too.

"RURI B-PART"

Associate a little more.

ADULT ONLY

お手数ですが、まずはじめにお読みくださいませ。
サークル自爆SYSTEMよりのお知らせです。

★インターネット上（ホームページ、UP掲示板など）
の無断公開は絶対に禁止します。

どんな言い分があろうとも禁止します。
尚、読者様、関係者のご連絡により結構判明します。
注意してもきりが無く、掲載された場合警告無しで対処します。

うさぎは弱いのだから、ほめてあげて
深く静かに活動してほしい。絵は再読者の足音前
ハニー・クッキー・コンスーニャー・あまはる
手紙のすずきあまはるはUP2かてるとせうけい
前 最古上りさんへはUP2かてるとせうけい
3000冊までをまもるのーまもるのー
お前がわかってるよ。どうせか
お前がわかってるよ。どうせか
お前がわかってるよ。どうせか



★P・N統一します。

いままで2個も3個もあり、ごちゃごちゃしてたのと、
一つの区切りとして統一します。
今後、涼樹 天晴（すずき あまはる）で全ていきます。
今後ともよろしくお願い致します。はい。

ごめん 色々考えたけど
お前がわかってるよ。どうせか
お前がわかってるよ。どうせか
お前がわかってるよ。どうせか

★18歳未満の人物及び現実と妄想の区別が
つかない人物などの閲覧、購入はご遠慮
くださいませ。
もちろんこの本の、一部または全ての
無断転載、引用等を禁止します。

お前がわかってるよ。どうせか

CONTENTS

JIBAKU-SYSTEM 2001.12.30

p 05 「カミング ホーム」
あなたの住む場所

小説 しだれ祐
挿絵 kodechi

p 15 「CRESCENDO4」

涼樹 天晴

p 41 「白と黒」

すとれ〜とF

p 46 「参加者あとがき」

p 48 「奥付」

p 14、39、40、45 「駄文、落書き」

涼樹 天晴

■注 意 事 項

インターネット上(ホームページ、IP掲示板など)の無断転載は絶対に禁止します。
どんな言い分があろうとも禁止します。

18歳未満の人物、現実と妄想の区別がつかない人物、以上の閲覧、購入はご遠慮くださいませ。
もちろんこの本の、一部または全ての無断転載、引用等を禁止します。

Copyright 2001 Jibaku System
all rights reserved. no part of this book may be reproduced or transmitted
in any form or by any means, electronic or mechanical, including
photocopying or recording, without permission in writing from publisher.
published and distributed by Jibaku System keeping group.

『カミング・ホーム』

— COMING HOME —

Sentence しだれ桜

Illustration KODECHI

いつも夢見ていた

のれんをくぐって

引き戸をがらがらと音を立てて

変わらない笑顔で

照れた顔のまま

少しうつむいて

「ただいまって……」

私は、その顔を見ると、ホッとしたように、はにかんで返す

「お帰りなさい」

私は、あなたにとっての帰る場所になりたかった

帰る場所でいたかった

それを望みながら、私は待ち続ける

いつか、帰ってくるという言葉現実を夢見て

「ジュンくん、天河ラーメンと五目ソバと火星井は、3番テーブルでお願い！」

「ユリカ……」口の中で、「何で僕が」と文句を言いつつも、ついつい体は正直に動いてしまう。

ほとんど習慣のように、ジュンは、トレイにオーダーをのせ3番テーブルへと運んでゆく。

ユリカの幼なじみの青年、連合宇宙軍中佐 アオイ ジュン。

かわいらしい容顔をして、見た目通り流されやすい性格をしているために、事あることに利用されてしまう、というか、自ら進んで利用されてしまう、哀れな青年である。

今も、たまたまの休暇を利用して、テンカワ ユリカの店の様子を見に来たが為に、体よくお手伝いさせられてしまっている。

雪菜と言う少女と恋愛関係になっているはずなのに、未だに初恋の相手の世話をさせられてしまう当たりが、あまりにも可愛そうだった。

そして、今日もいつものように手伝わされてしまう当たりが、実に可愛そうで、涙を誘う。

ジュンの行動は、実に、なれた手順、しかも素早く、そして的確な行動だった。

「はい、天河ラーメンと五目ソバと火星井お持たせしました」

そう言いながら3番テーブルへ運んだとき、ジュン、その彼を出迎えた少女の声。

「ジュンさん、手慣れてますね」

「ルリちゃん……」

連合宇宙軍 少佐 ホシノ ルリ。

別名電子の妖精、遺伝子配合で作られた人間

天下無双の美少女である。

「よっ！ 少佐殿」

「サブロータさん」

元木連 大尉 タカスギ サプロウタ。

昔は、熱血漢の軍人だったが、今は連合宇宙軍に所属して、外見も以前よりもちやらちやらした外見、性格をしている。

「あつ、あのおじやまします……」

「ハッ、ハリーくんまで……」

連合宇宙軍 少尉 マキビ ハリ。

ルリと同じく、遺伝子配合で作られた少年、ルリにほのかな恋心をいだいているのは、端から見てもよく分かるほどのわかりやすい、その弱々しい外見を見ても、実にいぢめたくなるような容顔をしているのが、大きな特徴である。

「いつの間に来たの？」

ジュンは、天河ラーメンのエプロンを着ている姿をトレイで隠すようにして、あわてふためいている。

「大変ですなあ、わざわざ休暇を使つてまで、ラーメン屋のお手伝いですか？」

「たつ、たまたま、よつただけで、いっいつもつてわけじゃあ」

どもりながら、サブローウタの言葉に必死に言葉を探しては、全身を使つて、言葉を否定する。

「いえいえ、小官は、少佐殿のお気持ち察しているだけです」

ゆつくりと、サブローウタは、椅子から腰を上げると、首回りにぐるりと腕を巻き付けて、耳元でポソリと囁いた。

「で、雪菜ちゃんとユリカさん、どつちが本命なんですか？」

「サッ、サブローウタさん、ボツ僕は、そんなふしたらな、」

今どき、こんな純粋な反応を返すのも珍しいくらい、思いきりみつともなくあわてふためいてみせる。

「また、お上手なこと……」

やや言葉をちやかして、サブローウタが、さらに言葉が続けようとした時。

「サブローウタさん」唐突に、サブローウタに、冷たい、比較的、感情を感じさせるようなルリの声が飛んだ。

「はい？」

「五目ソバ……。のびますよ」

「……………」惚けたジュンの顔。

「……」サブローウタが一瞬だけ、苦笑してみせる。そして、すぐに口元をほころばせると「りょーかい。少佐殿」とだけ呟いて席に帰った。

「では、頑張つて下さい」とだけ、最後にジュンの耳元で呟いたサブローウタ。

一瞬だけ、言葉に困るような、何か言いたそうな顔をジュンはしたが、カウンターのからの「ジュンくん！」と言うユリカの呼び声にすぐさまきびすを返すと、「はいはい」と叫んで、バタバタ走り去つてゆく。

「悪趣味です」天河ラーメンをすすりながら、ルリは一言呟いていた。

「何がですか？ 少佐」サブロウタは、苦笑気味に言葉返していた。

「分かっているはずですよ。サブロータさん」レンゲを使い、火星井を口元に運びながら、ハーリーがサブロウタを濡髪付けるように覗み付けた。

「左様ですか」と、苦笑気味にサブロウタは、ハーリーの視線を返しながら呟いていた。「でも、我々も、あまりアオイ中佐と変わらないような気がしますが」

「否定は、しませんよ。サブロウタさん」そう言った、ルリの一言。

サブロウタは、ルリの言葉にくくもった笑いで返す。ようやく、箸を手にすると、五目ソバを一口すすった。

「ほう、前よりは、ましになりましたね」

サブロウタの感想は、率直なモノだった。

ユリカが、アキトの帰る場所として、天河ラーメンの店を開店してから、はや9ヶ月。はじめのうちは、お世辞にも褒められたモノではなかったが、徐々に手慣れてきたようで、明るいユリカの人徳と色々な意味でのコネクションの結果によって、ようやく常連らしい客も掴みつつある。そして今、何とか、店としての体裁を整いつつあった。

「苦労してるようですから……」ルリは、ボソリと呟いていた。

「感傷は抜きにしましょう、我々はあくまで、客の立場なんですから」そう言いながら、ゆつくりと五目ソバをすするサブロウタ。

「まっ、我々もお節介焼きであることには、変わりがないわけですね」

誰とも無くサブロウタは、そう独りごちていた。

2

「いつもありがとう、ジュンくん。助かつちゃった」

「ユリカ……」ジュンは、カウンタ―に両肘を付くような形で、ユリカの顔を見上げていた。その向こうでは、ユリカが、たまった洗い物を一つ一つ片づけながら、ゆつくりと顔を上げていた。

「なあ、に……？ ジュンくん？ 洗い物したいの？」

「あっ、拭くの手伝おうか？」そう言いながら、腰を浮かせる。「じゃなくて！ 必死にその言葉を否定した」

「いつまで……。待つてるつもりなんだ？」

「……」ユリカの動きが静かに止まった。

「アキトが、帰ってくる保証はどこにもないんたろう？」

「ジュンくん……」ユリカは、ゆつくりと洗い物を再開した。

「でもね……。誰かが、帰る場所を用意して待つていないとね」

ユリカがそう言って、柔和な笑顔を見せた。

「ユリカは、それでいいの？」少しづつ、声に搭びてくる熱

「良いの」

「即答されると、それ以上、言葉が出せなかった」

「信じてるから……」

「また、それ？」

「うん……」

カチャ、カチャと洗いの音だけが、静かに店の中

に響いた。

カウンタ―に思いきり、両腕を組んでダラーンともたれかかるジュン。

物憂げな顔を作ると、ぼんやりとユリカに視線を移した。

「寂しくないの？」

ジュンの言葉に洗い物の手を止め、目をパチクリさせながらジュンに視線を移した。

「どうしたの、ユリカ？」

「ジュンくん、そこに太郎さんがいるよ？」

「太郎さん……？ って……」

そう言いながら顔を上げ、ユリカの視線の先に顔を向けた。

「……。ウワアああー！ ゴッゴキブライー！」

みつともないぐらいに声を上げると、あわてふためくジュン。

太郎さんとは、そうしたお店の害虫に対する総称である。

お客さんに聞かれても不快感を与えないように考えられた呼び方だ。

ジュンがあわてふためくと、ほとんど同時に、シユッ！ とウリバタケ特製『太郎さん撃滅殺虫剤』の煙が、ユリカの手から発射された。

一撃で沈む太郎さん。ユリカは、それを手際よく、ティッシュで捕まえると、ゴミ箱に捨てて、カウンタ―を手際よく拭き直した。

その流れ作業をぼんやりと見つめているジュン。

そしてまた、洗い物に戻るユリカを見ながら、しみじみと語りかけていた。

「ユリカ……。強くなったね。昔は、見ただけで、

「キヤ、キヤ」言つてたのに」

「料理屋やつてると仕方ないよ。」

「太郎さんとのつきあひは、宿命みたいなモノかな？
だから、もうなれちゃった」

ユリカは、そう言つて笑つてみせる。

「でさ……、ルリちゃんとか、みんなも良くここに来るの？」

その笑顔を見て、なぜかジューンは胸が締めつけられるように痛んだ。

何か言葉が濁さずにはいらなかった。ジューンは、思わず訊ねていた。

「うん、そうだね。みんな良く来てくれるよ」苦笑混じりにユリカは、ジューンに向き直つた。「よつほど、心配してくれてるんだね」

ユリカは、ふきんで手を拭きながら、バタバタとジューンの側によると、湯気の立ち上る湯呑みを置いた。

「ありがと、ジューンくん」

そのまま無造作にジューンの隣に腰を着けるユリカ。

「ユリカ……」

そつとジューンは、ユリカの顔を覗き込んだ。

「なに？ ジューンくん」

「いや……、みんな、ユリカのことを大切にしているんだなつて思つて」

「そうだね。みんなアキトが帰つてくることを待つてるんだよ」

「そう言つと、お茶をすすするユリカ。」

「ジューンくんも、待つてるんでしよう？」

「……………」ジューンは何も言わないで、しばらく黙り込んでいた。

「僕は、どうなんだらう」ジューンは、ユリカの顔を見

るたび、なんとも言えなくなつてしまふ。また、心のはじつこに未練を残しているのが分かる。

「？」まるで、不思議そうな笑顔でユリカはその顔に弾かべている。

「どうしたの？ ジューンくん？ おトイレなら、突き当たりを右だよ」

ジューンには分かる、ユリカのその惚けた様子は、マジ顔だつた。

「ユリカ……」静かにジューンは、腰を上げた。

「何で、ぼけられるんだらう……」

半ば、心の中で、嘆きの声を上げながら、ジューンはトイレに向かつて歩いていった。

「自分には分かる、一体どうしたのか、迷いを持つていた。」

「自分、ユリカが好きだつた。」

それはまちがいがいいない。

白鳥、雪菜、今、自分を慕つてくれている少女、雪菜がきてから、ジューンも変わった。

ユリカでなく、彼女を見るようになったのであるから、だが、傍目から見るとジューンは、雪菜に言いように弄ばれているような気がしないでもない。

それでも、白鳥、雪菜という少女は、ジューンに対して好意を寄せている。それは間違いない。

その気持ちに、振り回されているだけで、ジューンは答えていない。

「自分は、どうしたらいいのか？」

今だつて、こうしてユリカを手伝っている。

あまりに優柔不断な自分の気持ち、
ジューンには、それが見えるからこそ、自分という人

間を時々疑つてしまふ。

強くありたいと思つても、その感情自体をどうしたらしいのか、持て余し気味になつてしまふのである。

ゆつくりとトイレに姿を消すジューンの後ろ姿、

テンカワ、ユリカは、ジューンのその背中を見ながら、ぼんやりと呟いていた。

聞こえなくて良いほど。

「ユンくん、ごめんね……」

気が付いていないわけがない。

彼女は、自分でいることを選択を自分の意志で選ぶ。ユリカは、バカな振りをしているだけだとしたら？ あの天然ですら演技であるとしたら？

時折かいま見せる仕草、判断、そこにこそ彼女の心の真相があるとしたら？

それは正直、誰にも分からない真実。

この時もそれに近い顔をしていた。

「雪菜ちゃんを大切にね」

静かにその言葉を笑顔に載せて段の背中を見送つたユリカ。そのまま静かに扉を閉めた。

「さみしくないわけないよ……」

ユリカは、誰とも無く呟いた。

それでも、こうするしかないのだから、ユリカは自分の気持ちというモノを誰それに悟られたことはない。

そのように生きてきたのだから、誰かに寄りかかれたら楽なのだらう。

だが、ユリカは、その寄りかかるべき相手を一人だけと決めていた。だから、ジューンを突き放した。自分の決心を守るために……。

気が付いていないわけがない 見えないふりをしていただけ

つらくないわけがない 人はそんなに強い生き物じゃない

単純に追い求めることができたのなら……楽だ

でも、私は決めた 待ち続けることを

愛してるから

信じてるから

答えてくれることを信じて

「ユリカ……」

そう私の顔を見てささやいてくれる瞬間を待ち続けている

守りたいから

何を？

分かっているから

何のために？

二律背反する心 せめぎ合う気持ち

でも、私は決めた 信じることを……

そして、今宵も行われる儀式。

たつた一人を思つて静かに自分と向き合う。

誰かがいるわけでもなく、ただ、彼のことを思つて……

ユリカは、一人になると、エプロンをの腰ひも二手を

当てる時、それを投げ出すように捨てる。

ピンクのだささすら感じさせるTシャツ。

ノーブラであることは、汗で張り付いたあらわになつ

た乳房の形からでも分かる。

そして、乳首が勃起しているのが、布地の上からでも

はつきりと分かる。大きく丸みを帯びた乳房。貼りの

良さは、はつきりと見て取ることが出来る。

ブラをつけていないのに全然、型くずれしておらず、

つんとすました大きな乳首がTシャツの上から、見て

取る事ができる。

いきなりその身につけているTシャツを無造作にめ

くり上げる。ポヨンとポヨンと大きくその乳房が揺れ

動く。腰にピッタリと張り付いたジーンズ。腰のライ

ンもほとんど乱れていない。

そのジーンズもスルリと脱ぎ捨てた。

白く長く綺麗に伸びている素足。

腿の肉付きも良く、その付けねその先にある。

白と青のストライプがらのシンプルなパンツ。

一日を動き回っていたのだから、お尻も股のラインの

も、はつきりするほど食い込みを見せている。

はつきりとその秘部の筋をあらわにしていた。

そして、股布の部分からでも、はつきりと分かるくら

い濡れている。

熱く息を吐き出すとほとんど無造作にショーツを脱ぎ捨てていた。ユリカのプロポーションは、待ち続けるのが故の気持ちで、常に磨かれていた。

恥丘も大きな丸みを帯び、その秘部は柔毛で覆われ、

うっそうとしていた。だが、そこから、まるで、意志

を持って生物のようにヌメヌメとユリカの陰が、熱く

いよだれを垂らしていた。まるで、何日も食事にあり

ついていない、獣のように……。

それは食事を求めていた。

「はっあ……」ユリカの熱い吐息。

それに答えるように下の口が、熱く、太く、力強い、

愛する人をくわえ込みたいと、わがままを言っている。

その口が、ヒクヒクとうごめいて、変わりにユリカの

指に触れて欲しいと強くおねだりを求めてくる。

「んっん……」声を出すと同時に、ユリカは、思いき

り壁にもたれかかり、足を広げると、時部のスラリと

伸びた指をそつと、陰にあてがった。

「あっ……」

そのまま、下の唇に自分の指をからませる。

にちゅつと自分の指で、熱く、わがままな口を広げた。

満足げ陰がヒクヒクと言っている。

ナメクジのようなひだ。別の生き物のようにピンク色

をして、ヒクヒクと動いている。

「うっ、うん」

ユリカの上の口から、忍び漏れる言葉。

それは首筋に絡みつくような甘ったるい声だった。

いつもたつた一人の男にだけ聞かせた言葉。

「いつ、いい……」

熱い息をもらす口に指を当てると、そのまま無造作に、くちゅくちゅと音を立てるように荒々しくかき回した。

働いている間、ずっと、我慢していた。

ユリカが、一人になった時にとかれる抑制。

一日の終わり、いつもそれにふける。

誰かに寄りかからないと、自分が耐えられそうになか

ったから、ユリカは自分の豊富な乳房を思いきり驚揺

みにして、激しくこね回した。

形が、ゆがむ。

大きく、形の良い乳房。

乳首が激しくつんつと立っているのを、自分の指でつ

まみ上げて、さらに刺激を与える。

ユリカは、ラーメン屋の二階にある自分の部屋で行う、

自分と言う人間を確認するための儀式。

いつもはしてくれた愛する男を思つて、ただひたすら

に自分を求め続ける。

「もつと……」そうあえきながら、指は自分のひだを

なぞり、つまんでは、強くかき回す。

「いいっ……いいのお」

花びらを指先で軽くひねるだけで、電気にも似た刺激

が、ユリカの背中を駆け抜ける。そして、びくりつと

何かの背中を駆け抜け、強くのけぞった。

「あつてえ」ささやかな指の動きに密着は、答えるよ

うに激しく、熱い唾液を垂らしていた。

「エイッ！」そう言いながら、ユリカは、「もつとお、

もうッとお」と叫び声を上げながら、乳首と激しくつ

まみ上げる。

「アキト……」ユリカのユリカをかき乱してえい！

自分の中に聞こえる声がユリカを動かしていた。

「ユリカのいやらしい場所、ユリカのいやらしい場

所にい……」

思いきり足を広げ、ユリカはしゃむに自分の陰裂に刺

激を与えていた。愛する人の為に成長した乳房。

大きな乳輪にそつて指をはわずたびに、その赤く整つた唇から、せつなげな息を漏らす。

「はあ……、もつと、ユリカの、ユリカをいぢつて」
自分の指を愛する人の指に見立てて、自分を求め続ける。

この時だけ、ユリカはアキトと一つになれていた。
愛する人の一物が、ユリカの中を激しく、荒々しく、
何度も何度も突き立てる。

指が、ぐちぐちと音を立てて出入りする。

「ユリカに、ユリカ……」

ただ獣のように、ユリカは自分のツンとすました乳首の先を器用に弄び、下の口のささやきに指と共に戯れていた。

「あつ、アキトといきたいのね、アキトとおー」

自分の求めてやまない衝動が、下の口にいやらしい刺激を与え、何度も何度も身をくねらせながら、指を入れたり出したりしている。

ユリカの、愛液に濡れた指が、そつと、自分の豆に触れる。豆をつまんでひねり上げる。

同時に自分のもう一つの手が乳房を、荒々しくかき乱していた。

「アキト……アキトおー」

ユリカは、求めてやまない最愛の人の名前を叫んでいた。

畳の上に、身体を投げ出ししている。しばらく慄然と、自分の愛液で汚れた指を見つめていた。

濡れる指……

見つめる瞳

徐々に自分の口に近づいてくる指。

ユリカは、そつと舌をはわせた。

5

カウンター席に座るルリ。今日は、ジューンもハーリーもアオイもいない。珍しくルリ一人で天河ラーメンを訪れることができた時だった。

少しだけ、守られていた。過去に戻りたいときがある。ユリカとアキトの側にいるときルリはそれに帰ることができた。

「バカばつか」と言っていたとき、その時が、不思議と、一番守られていた時間だった。

ルリは振り返ってみると、今にして分かる。だから、ここには、一人で来たかった。

誰にも邪魔をされずに……

「ユリカさん？」ルリは、ユリカが、客の食器を片づけ、厨房に戻ってきたタイミングを見計らつて、少しだけためらいながら、訊ねられた言葉。

「なに？ ルリルリ？」ユリカは、元氣良く答える。

「二つ、お尋ねして良いですか？」

そう言ったルリの顔は、いつもより、ぎこちのない笑みの混ざつた不思議な顔だった。

「うん、いいよ」ユリカはほとんど即答していた。それを見たルリは、ユリカは、なにも考えていないのではないかと疑いたくなる。

だが、そんな考えは杞憂だった。

艦長になつて、苦勞を背負い込んでみたルリには、ユリカの気持ちがあるの少しだけ分かつたような気がするのだ。

だから、ずつと問いかけたかった。胸の奥にしまい込んだ言葉を……

「どうして……」一度そこで言葉を区切る。

だが、顔を上げると意を決して言葉を続けた。

「どうして、信じていることができるんですか？」いつもユリカは、根拠もなく信じていた。

それが、ルリには不思議だった。

そして自分も信じた振りをしていた。

だが、振りはあくまで振りでしかなかった。

「誰を？」ユリカの言葉には、迷いのかけらもなく、はつきりとルリを見据えていた。

決断を下すときの真剣な顔だ。

「誰をつて……」ルリは言葉につまつてしまう。

問い返したユリカは、満面の笑みを見せていた。

「理由は要らないよ」

「だって、ここに帰つて来るって保証は……」

「ただ、信じてるから……」

私が、アキトは帰つて来るって」

ユリカの言葉。自分を信じているからこそ、他人を信じていることができる。

耐えられない気持ちと戦いながら、誰かがそう思っていないければ、アキトは帰つてこない。

「アキトの帰つてくる場所はここだけだから」

愚問だった。ルリはユリカの姿にそう感じていた。

見えないところで、苦しんでいてもそれを見せないことがどれほど難しいか、それでもユリカはそれを選んだのだ。全てを受け入れ、気付かない振りをしながらも、自分を信じて。

あなたの帰る場所はここであると……



■なんとなく描いてしまう愛すべきキャラ…■

パイオハザード2よりレオン×シエリー

…なんでいまさら…

なんとなくこの二人気に入ってるので描いてしまう…

シチュエーション的には極限状態だったらこうなっても不思議でないよね？

という状況な話で作成中…ってどうですか？無理だね～シナリオは出来てるけど…

こういうのどうよ？え、駄目？？

ちっ、そうだ愛、うん愛がなせる技ということで正当化…

…いいよどうせ外道ですとも…

はやく新作でないかな

金ついでに色々描いてみるよ
 1/10の：アノニマス（この秋は傑作でしょう）
 2/10の：アノニマス（この秋は傑作でしょう）
 3/10の：アノニマス（この秋は傑作でしょう）
 4/10の：アノニマス（この秋は傑作でしょう）



どうでもいい雑文、なんで映画とかドラマはカメラワークが変わると寸前まで発狂してなのに自動拳銃はハンマーが有りてるんだ？
 製作者側は変だとおもわないのだろうか？
 例、拳銃を顔にあしつける時など…
 こうゆう所をこぼわってる映画見ると嬉しいですね。

（お、資料は1冊-1
 2冊-1





KAKO

—— 過去 ——

scene "RURI" part

CRESCENDO IV

presents by
"suzuki amaharu"



生理中だったんだ…
気がつかなかった…
ゴメン…



あ…いえ…



SCOTTIE TOWELS

あ…いえ…

いいから、いいから

あう…や…じ…

じ…自分で…拭き…ます…から

だ、大丈夫…です…から…



あ...



実際の所、俺まだ...

えーおんおけ中に止して呑んてんが...



はい？

あーその...ルリ

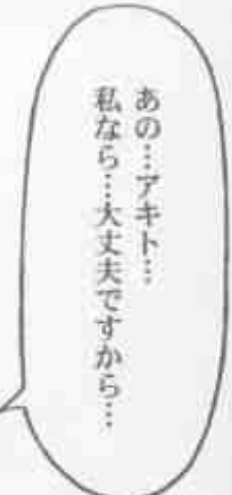
ほう音板は
うんうんわけだし...

どうも...その...
久しぶりだったもので...



おわい...
11...
受ける~

まをがーし



あの...アキト...
私なら...大丈夫ですから...



ではお言葉に
甘えて、と

むふ、むふ

あん

ア...ア、アキト...？



お尻の穴でもしてたんですか…

よく、ほくして
おかないとねー



締まる締まる

指が食べられそう…



ん？

ん？

ん？

そ…

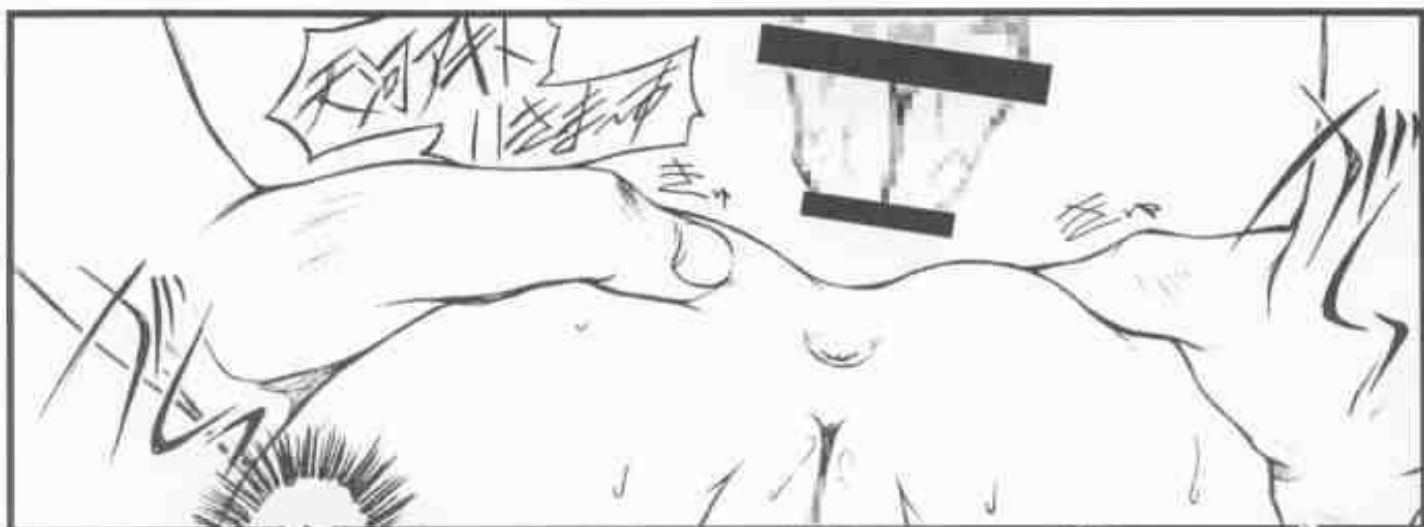
お…尻の…穴…です…

そうだよ、生理中は
いつもアナルだろ？

…そう…です…ね…











お…お尻…

壊れ…さげさ…



26





良かった?

ルリはアナルセックスも好きだからな!

えーそれは
恥ぢあつて
解らなかつた
えーと
それ

はーん



艦長

あ

あ



最初、お尻の穴はとても痛かったけど…

テンカワさんが何回目かの射精からは前に入れられるよりも気持ち良くなり…

私も…いってみたいですね…



でもなにより良い事は

テンカワさんの物を全部受け入れられた…

…いつもの日常…



…ただ隣にいてだけで心が安らいた…

はい

ニッコウね

…ただ同じ場所にいるだけで楽しかった…

…ただ一緒に過ごすのは嬉しかった…

…家では恋人同士に…甘い一時…手放したく無い仮そめの夢…



…私がない時、こんな事してたんですね…

…ちょっと…くやしくて…うらやましい…

…楽しい時間は短く…
…何事も始まりがあり終わりが有ります…
…一週間という時間が流れ…明日…艦長が帰って来ます…



…アキト…



ずっと夜が明け
なければいいのに…

このまま…



ん……ル……リ？

ぼん……

…泣いてるのか？



33



…たくさんの心と想いをありがとう…

…アキト…

…愛しています…

…私は二人の事が好きです…

…二人が悲しむ顔を見たく無い…

…いつでも笑っていてほしい…

…でも…

…恋してしまったから…

…愛してしまったから…

…だから…

…あきらめる為のわたしのワガママ…

…テンカワさんの記憶を…

…完全に書き換える事もできるのに…

…どうしても出来なかった…

…だから何重にもプロテクトして…

…封印しただけ…

…憶えていますから…

…心が…体が…

…だから思い出だけで十分です…

…結婚式…



…私は最後まで微笑っていられた…



…ただずっと一緒にいたいだけ…



…もうそれ以上は望まない…



それだけだったのに…あの人達は…あの方は…

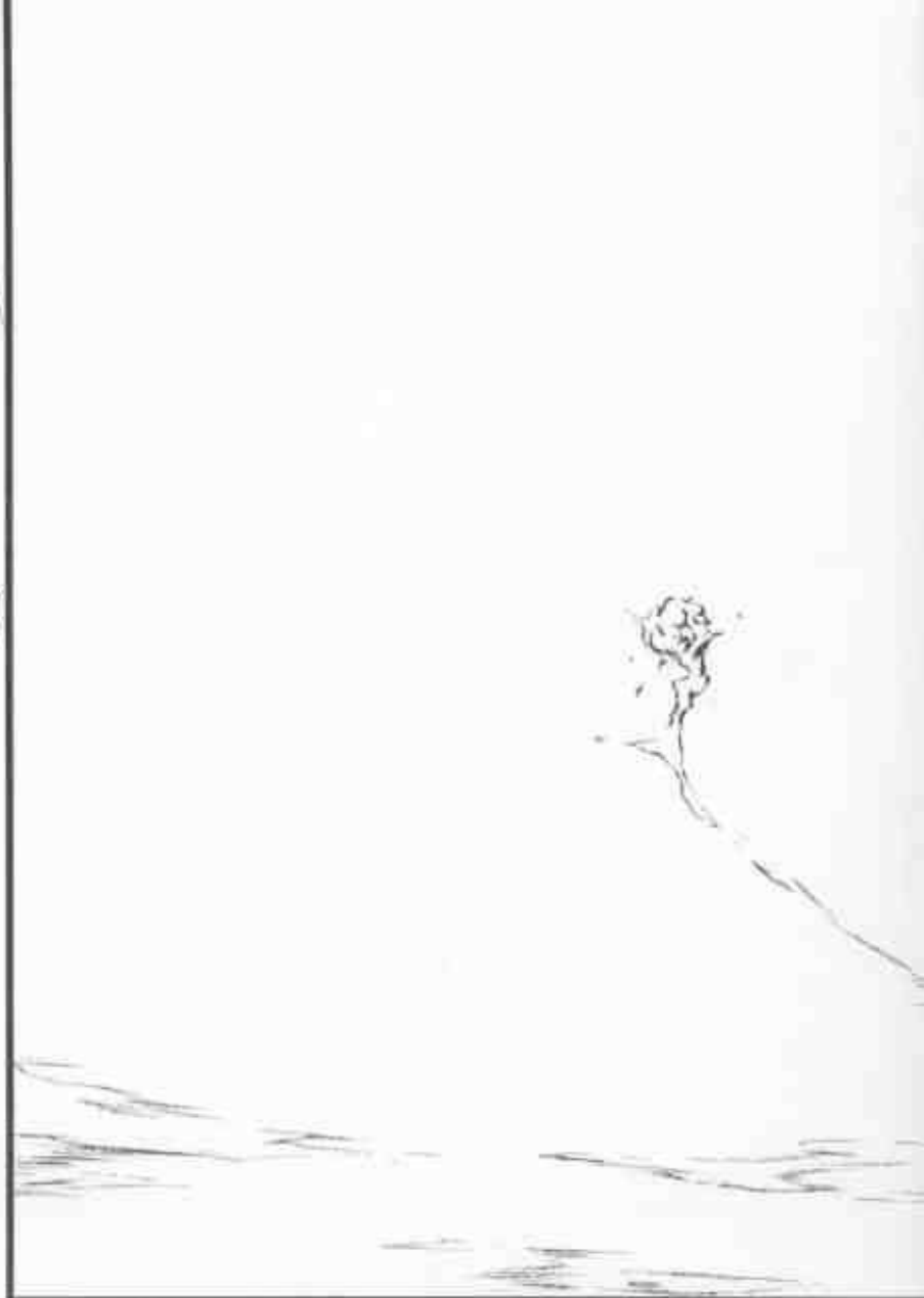
…一瞬の…

…悪夢…

36

…そばにいただけで良かったのに…





37

…私の意識はそのまま闇につつまれ…

…心の時間が止まった…





死ぬ事も考えた…置いて行かたく無いから
でもきっとあの人達は望まないから…
たくさんの心を買ったから…
私が生きていく事があの人達の生きた証だから…
人は思い出だけで生きていけるから…
この胸の奥にあるから…
でも…もう…
…あんなに強く人を愛することは…
…きっとでき無い…

いやあゝ
中に：：中にでてますうゝ
うらあ全部申だしだ

妊娠するまで
全員膣内射精決定
嫌ゝ

…没原画…うう…
G集作成予定だったんだけどお蔵入りした原画…
題材はラブのな、しのぶとサラですな
薬か説がなんか適当な理由でもって
暴走泉太郎のドッベルゲンガーに犯される図
…まともな資料ないんでかなり適当…

あーもうほんとに
うらあほんとにうらあ
まあ20と17の時はいい
まあ20の時も、まあ20の時
いやあ、ほんとにうらあ
ええ、ほんとにうらあ
ほんとにうらあ、ほんとに
ほんとにうらあ、ほんとに
ほんとにうらあ、ほんとに
ほんとにうらあ、ほんとに

どおだビクビク出てるのがわかるか？
あひいいい熱い熱いよおゝ

痛い痛い痛いゝ
糞餓鬼があ生意気なんだよお
赤飯前だから安心ってか
子宮の中に直接ねじ込んで
出してやる
ひぎやいゝ

■かなり適当なキャラ原案■

電話で話しながら作成、構成要素は
ロリ顔、巨乳で眼鏡っ娘
なんじゃこりゃ、
萌え要素らしいが自分が描くと…
別に萌えない
…腕が未熟なせいかな…
一応、同一コンセプトで試作

これらは今回Z1Pで描く予定の姉キャラ
このうち一人を採用予定…ア○レちゃんだ…
突っ込み入るが無視。
でも眼鏡は無しですな。
他のキャラとかぶってるし…
(本音はめんどいから)

2002年2月完成予定…ごめんT田さん…
M治さん4月までにはなんとか…
あーうー…

・このキャラはZ1Pの姉キャラの試作
・髪は肩までで、ア○レちゃん
・眼鏡はア○レちゃんと同じ
・胸はア○レちゃんと同じ
・腕はア○レちゃんと同じ

・このキャラはZ1Pの姉キャラの試作
・髪は肩までで、ア○レちゃん
・眼鏡はア○レちゃんと同じ
・胸はア○レちゃんと同じ
・腕はア○レちゃんと同じ



・このキャラはZ1Pの姉キャラの試作
・髪は肩までで、ア○レちゃん
・眼鏡はア○レちゃんと同じ
・胸はア○レちゃんと同じ
・腕はア○レちゃんと同じ

・このキャラはZ1Pの姉キャラの試作
・髪は肩までで、ア○レちゃん
・眼鏡はア○レちゃんと同じ
・胸はア○レちゃんと同じ
・腕はア○レちゃんと同じ

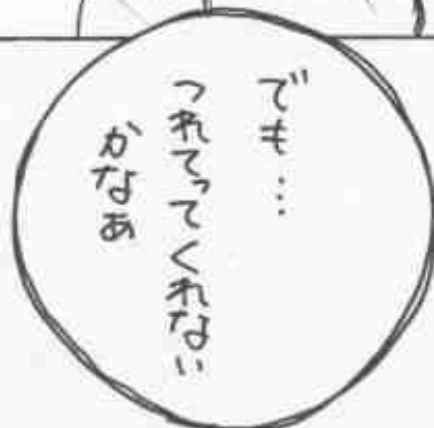
白と黒

2001.12.23
すけとけ.









ぽ

ぽ

おしまい



奥付

平成 13(2001)年 12月 30日 FIRST-VERSION.

発行者 涼樹天晴

発行所 自爆SYSTEM

ホームページアドレス <http://home9.highway.ne.jp/jibaku/>

連絡先メールアドレス kimidori@pb.highway.ne.jp

印刷所 トム出版様

この本は、印刷屋さんが丹精込めて印刷製本して下さいましたものです。
万一、落丁乱丁本があったとしても、それは本書数日前に入稿するという
愚筆に出てる執筆陣の責任です…。許してください。
本誌の、一部または全ての無断転載、引用等を禁止します。
定価はイベント、及び一部の同人誌取扱い店舗にて表示してあります。
インターネット上（ホームページ、UP掲示板など）の無断公開は絶対に禁止します。
18歳未満の人物、現実と妄想の区別がつかない人物、以上の閲覧、購入はご遠慮くださいませ。
2001 JibakuSystem, Printed in Japan

Copyright 2001 Jibaku System
all rights reserved, no part of this book may be reproduced or transmitted
in any form or by any means, electronic or mechanical, including
photocopying or recording, without permission in writing from publisher.
published and distributed by Jibaku System keeping group.



CRESCENDO IV

It is completely connected this time with the past story, too.

"RURI B-PART"

Associate a little more.

ADULT ONLY